

資料

看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴(第2報) —高齢者とのコミュニケーションの視点から—

竹田恵子*¹ 白岩千恵子*² 小薮智子*¹

要 約

看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を、高齢者とのコミュニケーションに注目し明らかにすることを目的とした。A大学の2年次および3年次の看護学生246名を対象に、コミュニケーション・スキル（ENDCOREs, NCSI）および高齢者とのコミュニケーションで心がけていることについて、無記名自記式質問紙調査を行った。有効回答数は92であった。分析の結果、A大学の看護学生はENDCOREsでは「表現力」「自己主張」のスキルが低く、特にNCSI低群では、「言語表現」「独立性」「論理性」に課題があること示された。看護学生は高齢者とのコミュニケーションにおいて、【高齢者の特徴と理解度に合わせた表現方法】、【受容と尊重】、【良好な関係づくり】を心がけていた。老年看護実践に求められるコミュニケーション・スキルの育成においても、「自分の考えを論理的にまとめて表現するスキル」の強化が課題となることが示唆された。

1. 緒言

超高齢社会にあるわが国において、看護の対象も高齢者が多くを占める。平均寿命の延伸に伴い、入院加療をする認知症高齢者や要介護高齢者も多く、看護師には疾患の看護のみならず高齢者の特徴をふまえた看護実践が求められる。看護の対象となる高齢者を理解するためには、現在の心身の状態に加えて、高齢者の生きてきた時代背景や生活歴、生活行動などの情報を得てアセスメントすることが必要であるが、加齢に伴う感覚器の機能低下や認知機能の低下等により、コミュニケーションをとりづらい高齢者も少なくない。そのため、看護師にはより高いコミュニケーション・スキルが求められる。

看護基礎教育においては、「対人技法を用いて、援助的なコミュニケーションをとる」ことが卒業時の到達目標の1つにあげられ¹⁾、「対象となる人々の意思決定の支援」ができるまでのコミュニケーション力が期待されている²⁾。老年看護学教育においても、講義や演習、実習などで高齢者とのコミュニケーションを学習する機会はあるが、コミュニケーションについて悩む学生も少なくない。高橋³⁾は、看護学

の学習における看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する文献検討を通して、看護学生の基本的コミュニケーション・スキルの育成に重点を置いた教育的支援を検討する必要があることを指摘している。

本研究の目的は、看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴を、高齢者とのコミュニケーションに注目し明らかにすることである。本研究の結果から、コミュニケーション・スキルの向上を目指した教育への示唆が得られると考える。

2. 方法

2.1 調査対象

調査対象は、A大学の看護学生246名（調査票配布時点での2年生135名、3年生111名）である。調査対象者の学習状況は、2年生では高齢者疑似体験および講義により高齢者の心身の特徴や生活について学習している。さらに身近な高齢者へのインタビュー課題を通して、「語ること」「聴くこと」の意味について考えた。また、基礎看護学実習で高齢患者を受け持った学生もいる。3年生は老いや疾患に

*1 川崎医療福祉大学 保健看護学部 保健看護学科

*2 介護老人保健施設 サンライフ倉敷 通所リハビリテーション

(連絡先) 竹田恵子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学

E-mail: takeda@mw.kawasaki-m.ac.jp

伴う高齢者の特徴をふまえた看護援助や認知症をもつ高齢者とのコミュニケーション技法の1つであるユマニチュードについて学習している。そのうえで、老年看護学実習において疾患の治療のために入院加療している高齢患者および施設に入所している認知症高齢者を対象とした実習を行っている。

2.2 調査方法

無記名自記式の質問紙調査を行った。調査の依頼と説明は、調査書類一式を配布し、文書および口頭で行った。回答後の質問紙は、質問紙の配布後2週間を目途に、各自回収ボックスに投函してもらった。調査期間は2018年3月～4月であった。

2.3 調査内容

調査内容は、学年、高齢者との関わり、高齢者とのコミュニケーションで心がけていること、コミュニケーション・スキルである、コミュニケーション・スキルは、藤本ら⁴⁵⁾のコミュニケーション・スキル尺度（以下、ENDCOREs）、荒添⁶⁾の看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーション・スキル尺度（以下、NCSI）を用いて測定した。

2.4 分析方法

分析には IBM SPSS Statistics25を用いた。まず、ENDCOREsのメインスキル得点、NCSIの下位スキル得点を中央値（第1四分位数-第3四分位数）で示した。次に、NCSIの得点を中央値で分けた高低群別にENDCOREsの24サブスキル得点について、Mann-WhitneyのU検定により比較した。有意水準は5%とした。ENDCOREsの24サブスキル得点については、中央値（第1四分位数-第3四分位数）で示した。さらに、高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていることの記載内容を質的記述的に分析した。

ENDCOREs⁵⁷⁾は、言語および非言語による直接的なコミュニケーションを適切に行う技能である24項目のサブスキルから成るコミュニケーション・スキル尺度であり、表出系のスキルである「表現力」と「自己主張」、反応系のスキルである「解読力」と「他者受容」、管理系のスキルである「自己統制」と「関係調整」の6つのメインスキルで構成される。7件法で回答を求め、「かなり得意」=7点、「得意」=6点、「やや得意」=5点、「ふつう」=4点、「やや苦手」=3点、「苦手」=2点、「かなり苦手」=1点としてメインスキルごとに得点を加算し、項目数で除してメインスキル得点を算出した。

NCSI⁶⁾は、8下位スキルから構成される37項目の尺度である。各項目について5件法で回答を求め、「いつもやっている」=5点、「しばしばやっている」=4点、「時折やっている」=3点、「一度はやっている」

=2点、「やったことがない」=1点として得点化した。本研究では37項目の得点を加算し、NCSI得点を算出した。

3. 結果

3.1 対象者の属性

質問紙の回収数は101（2年生38, 3年生63）であった（回収率41.1%）。そのうち有効回答は92（2年生35, 3年生57）であった（有効回答率96.8%）。表1に対象者の属性を示した。祖父母との関わり頻度については、年1～2回と回答した者が53名（57.6%）と最も多かった。

3.2 コミュニケーション・スキルの評価と特徴

3.2.1 ENDCOREs メインスキルの得点分布 (表2)

ENDCOREs メインスキルの得点分布は、表出系のスキルである「表現力」「自己主張」がともに中央値3.75と低く、特に、「自己主張」については第3四分位数が4.25と全メインスキルにおいて最も低かった。一方、反応系のスキルである「解読力」「他者受容」の中央値はともに5.00であった。特に、「他者受容」は第1四分位数-第3四分位数が4.50-6.00とメインスキルのなかでも最も高かった。

表1 対象者の属性

	人数 (%)
学年 2年生	35 (38.0)
3年生	57 (52.0)
高齢者(祖父母)との関わり頻度	
ほとんど毎日	6 (6.5)
週に4-5回	2 (2.2)
週に2-3回	4 (4.3)
週に1回	20 (21.7)
年に1～2回	53 (57.6)
ほとんどない	7 (7.6)

表2 ENDCOREs メインスキルの得点分布

表出系	表現力	3.75 (3.25-4.50)
	自己主張	3.75 (3.25-4.25)
反応系	解読力	5.00 (4.00-5.50)
	他者受容	5.00 (4.50-6.00)
管理系	自己統制	4.50 (4.25-5.25)
	関係調整	4.75 (4.25-5.25)
		中央値(第1四分位数-第3四分位数)

3.2.2 NCSI得点の高低群別にみたENDCOREsサブスキルの得点分布

NCSI得点の中央値（第1四分位数-第3四分位数）が、155（142-163）であったことから、155点以上をNCSI高群（以下、高群）、154点以下をNCSI低群（以下、低群）とした。高群は45名（51.7%）、低群は42名（48.3%）であった。

表3にENDCOREsサブスキルの得点分布を示した。本調査において、「ふつう」を示す4点よりも中央値が高かったサブスキルは、「言語理解」「身体理解」「表現理解」「情緒感受」「共感性」「友好性」「譲歩」「他者尊重」「欲求抑制」「道徳観念」「関係重視」「関係維持」であり、いずれも中央値が5.00であった。一方、「言語表現」と「論理性」は、いずれも中央値3.00であった。

ENDCOREsサブスキル得点を高低群で比較したところ、「身体表現」「表情表現」「支配性」「柔軟性」「身体理解」「表情理解」「共感性」「友好性」「譲歩」「他

者尊重」「道徳観念」「期待応諾」「関係維持」「意見対立対処」「感情対立対処」において5%水準で有意差を認めた。反応系スキル、管理系スキルのサブスキルは、高低群により有意差のあったサブスキルにおいてもすべて4点以上であった。一方、表出系スキルは、低群においては「言語表現」「支配性」「論理性」において中央値が3.00であった。また、高群においても「言語表現」は中央値が3.00であった。

3.3 高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていること

「高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていること」について思いっただけ記述するように求めたところ、235の回答のあった。表4に質的記述的に分析した結果を示す。235の回答は、42のコードに整理され、9のサブカテゴリー、3つのカテゴリーに統合された。以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを<>、コードを『』で示す。

高齢者とのコミュニケーションにおいて看護学生

表3 ENDCOREsサブスキルの得点分布

系統	階層	メインスキル	サブスキル	全体 (n=87)	低群 (n=42)	高群 (n=45)	p値
表出系	基本スキル	表現力	言語表現	3.00 (3.00-4.00)	3.00 (2.00-4.00)	3.00 (3.00-4.50)	0.083
			身体表現	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.50-5.00)	0.003
			表情表現	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-4.25)	4.00 (4.00-5.00)	0.023
			情緒表現	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (2.75-4.00)	4.00 (3.00-4.00)	0.134
	対人スキル	自己主張	支配性	4.00 (3.00-4.00)	3.00 (2.75-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	0.004
			独立性	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	0.158
			柔軟性	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (3.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	0.005
			論理性	3.00 (3.00-4.00)	3.00 (3.00-4.00)	4.00 (3.00-5.00)	0.084
			言語理解	5.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	5.00 (4.00-6.00)	0.188
反応系	基本スキル	解読力	身体理解	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-5.00)	5.00 (4.00-6.00)	0.018
			表情理解	5.00 (4.00-6.00)	4.50 (4.00-5.00)	5.00 (4.50-6.00)	0.005
			情緒感受	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-5.25)	5.00 (4.00-6.00)	0.158
			共感性	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-5.25)	5.00 (5.00-6.00)	0.007
	対人スキル	他者受容	友好性	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	6.00 (5.00-6.00)	0.001
			譲歩	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-5.00)	5.00 (5.00-6.00)	0.007
			他者尊重	5.00 (5.00-6.00)	5.00 (4.00-5.25)	5.00 (5.00-6.00)	0.008
			欲求抑制	5.00 (4.00-6.00)	4.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-6.00)	0.442
			感情統制	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (3.75-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	0.289
管理系	基本スキル	自己統制	道徳観念	5.00 (4.00-6.00)	4.50 (4.00-6.00)	5.00 (4.50-6.00)	0.041
			期待応諾	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (3.00-5.00)	5.00 (4.00-5.00)	0.008
			関係重視	5.00 (4.00-6.00)	5.00 (4.00-5.00)	5.00 (4.00-6.00)	0.368
			関係維持	5.00 (5.00-6.00)	5.00 (4.00-5.25)	5.00 (5.00-6.00)	0.021
	対人スキル	関係調整	意見対立対処	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	0.039
			感情対立対処	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	4.00 (4.00-5.00)	0.038

Mann-WhitneyのU検定

中央値(第1四分位数-第3四分位数)

表4 高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていること

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数(2年生,3年生)	
高齢者の特徴と理解度に合わせて表現方法	高齢者の聞こえの特徴をふまえた話し方をする	ゆっくり話す	11(1,10)	
		話すスピードに配慮する	1(0,1)	
		大きな声で話す	7(2,5)	
		声の大きさに配慮する	4(0,4)	
		声のトーンに配慮する	6(1,5)	
	高齢者が理解しやすいように表現方法を工夫する	はっきり話す	3(2,1)	
		声の大きさ, トーン, 速さ, 明瞭さに配慮する	20(10,10)	
		わかりやすく伝わりやすいことばを選ぶ	11(4,7)	
		身ぶり手ぶりをを用いる	2(0,2)	
		口元や表情がわかるようにする	5(0,5)	
相手の状態や理解度に合わせて話をする	相手の視界に入って話をする	3(1,2)		
	対象者の聴力に合わせて聞こえるように話す	4(1,3)		
	一度にたくさんのことばを話さない	2(1,1)		
	質問攻めにせず相手のペースに合わせて話をする	2(1,1)		
	反応から伝わっていない時には再度話しかける	2(1,1)		
受容と尊重	相手の話をしっかり聴く	相手の反応をみながら話をする	4(2,2)	
		傾聴する	4(2,2)	
		聞き手になり話を聞く	3(2,1)	
		話を遮らず最後まで聞く	6(0,6)	
	高齢者が話しやすい態度で話を聴く	自分の考えを押し付けたり相手を否定せず尊重す	6(0,6)	
		うなずきながら共感的に聴く	10(5,5)	
		相手の話に反応しながら聞く	3(1,2)	
		非言語的コミュニケーションを活用する	2(1,1)	
	安心感を伝える	沈黙や間を大切にす	2(0,2)	
		タッチングをする	14(1,13)	
話しやすい雰囲気や環境に配慮する	ユマニチュードの技法を用いる	3(0,3)		
	笑顔で接する・話す	13(4,9)		
	明るい声ではきはきと話す	3(3,0)		
	目線を合わせて話す	35(10,25)		
	穏やかな表情, 好意的な態度で接する	11(3,8)		
	困った顔や面倒そうな態度を取らない	2(0,2)		
	沈黙の時間をつくらないようにする	1(1,0)		
	プライバシーへ配慮をする	2(1,1)		
	良好な関係づくり	相手に関心を持ち理解を深める	相手の心情を知ろうとする	2(1,1)
			自己開示しながら相手を理解しようとする	1(0,1)
相手のことを理解しようとする			2(0,2)	
話題をみつけ, 広げる			2(1,1)	
ひとりの人として敬意をもち出会う		まず相手の話を聞く	4(3,1)	
		挨拶と相手の名前を呼び適切な関係づくりに努め	2(2,0)	
		尊敬の気持ちを持ち出会う	5(2,3)	
		敬語や丁寧なことばで話す	10(0,10)	
		年寄り扱いをせずひとりの人として接する	2(1,1)	

が心がけていたことは、【高齢者の特徴と理解度に合わせて表現方法】、【受容と尊重】、【良好な関係づくり】であった。

【高齢者の特徴と理解度に合わせて表現方法】では、『声の大きさ, トーン, 速さ, 明瞭さに配慮する』などのように、《高齢者の聞こえの特徴をふまえた

話し方をする》ことを心がけていた。また、『わかりやすく伝わりやすいことばを選ぶ』ことや『口元や表情がわかるようにする』などのように、《高齢者が理解しやすいように表現方法を工夫する》ことをしていた。さらに、『対象者の聴力に合わせて聞こえるように話す』『質問攻めにせず相手のペース

に合わせて話をする』『相手の反応をみながら話をする』などのように「相手の状態や理解度に合わせて話をする」ことを心がけていた。

【受容と尊重】では、『傾聴する』『話を遮らず最後まで聞く』などのように「相手の話をしっかり聴く」ことを心がけていた。また、『うなずきながら共感的に聴く』ことや『沈黙や間を大切にする』などにより「高齢者が話しやすい態度で話を聴く」ことを心がけていた。さらに、『タッチングをする』『ユマニチュードの技法を用いる』ことで「安心感を伝える」ことを心がけていた。

【良好な関係づくり】は、「話しやすい雰囲気や環境に配慮する」「相手に関心を持ち理解を深める」「ひとりの人として敬意をもち出会う」の3つのサブカテゴリーから構成されていた。看護学生は、高齢者と『視線を合わせて話す』ことや『穏やかな表情、好意的な態度で接する』こと、『困った顔や面倒そうな態度を取らない』ことなど、「話しやすい雰囲気や環境に配慮する」ことを心がけていた。また、『自己開示しながら相手を理解しようとする』ことや『話題を見つけ、広げる』ことなど、「相手に関心を持ち理解を深める」ことを心がけていた。さらに、『尊敬の気持ちを持ち出会う』ことや『敬語や丁寧なことばで話す』こと、『年寄り扱いをせずひとりの人として接する』ことなど、高齢者と「ひとりの人として敬意をもち出会う」ことを心がけていた。

4. 考察

4.1 看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴

ENDCOREsは、直接的コミュニケーションを円滑に行うために必要な話す・聴くといった文化や社会に共有する能力を測定する尺度である。サブスキル得点から、「解読力」や「他者受容」、「自己統制」、「関係調整」において、「ふつう」から「やや得意」と考える者が多い一方で、「表現力」と「自己主張」においては苦手意識をもっており、課題があることが明らかになった。この結果は、小沢ら⁸⁾や山本ら⁹⁾の研究結果と同様であり、A大学のみならず看護学生に共通するコミュニケーション・スキルの特徴であると推察される。さらに本研究では、NCIS低群においては、有意にENDCOREsサブスキルの「支配性」について苦手意識を持っていることが示された。また、NCISの高低群で有意な違いがないものの、両群において「言語表現」が、低群において「論理性」に課題のあることが示された。個別性のある看護を実践する上で対象者理解は重要不可欠

であり、その際に対象者をありのままに理解する姿勢が求められる。また、看護を展開する上で、治療や療養上で必要になることがらについてわかりやすく論理的に伝えるスキルや看護師自身の考えを伝えるスキルも求められる。しかし、高橋³⁾が指摘するように、看護学生は潜在的に高い他者受容スキルを備えており、対象者に受容的にかかわるスキルが高いゆえに自分自身の考えを表現することができなくなっている可能性も考えられる。また、日常的にSNSで短文でのメッセージやスタンプ、絵文字などを用いて自分の考えや感情を表現することが多い世代であることも、自分の考えを論理的にまとめて表現するスキルが低いことの一要因であると考えられる。

4.2 高齢者とのコミュニケーション・スキルの特徴

太湯¹⁰⁾が「よいコミュニケーションがないところに、よい看護はあり得ない」と指摘するように、看護においてコミュニケーションは重要な役割を果たす。コミュニケーションは、伝える側と伝えられる側のインタラクティブなプロセス¹¹⁾である。高齢者とのコミュニケーションにおいては、加齢による視力・聴力などの感覚機能の低下や、注意力・記憶力、理解力などの認知機能の低下、さらには心理的な問題や疾患や障害による言語障害などさまざまな要因が、高齢者と看護師双方の「伝えること-伝えられること」に影響する。そのため、看護師にはこれらの要因をふまえたコミュニケーション・スキルが求められる。本研究において、看護学生が高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていることは、【高齢者の特徴と理解度に合わせた表現方法】、【受容と尊重】、【良好な関係づくり】の3つのカテゴリーに整理された。

【高齢者の特徴と理解度に合わせた表現方法】に含まれる「高齢者の聞こえの特徴をふまえた話し方をする」と「高齢者が理解しやすいように表現方法を工夫する」は、ENDCOREsメインスキルの「表現力」に、「相手の状態や理解度に合わせて話をする」は「表現力」と「自己統制」のコミュニケーション・スキルに該当する内容と考えられた。このように多くの看護学生が【高齢者の特徴と理解度に合わせた表現方法】を大切にしていた。しかし、『わかりやすく伝わりやすいことばを選ぶ』『一度にたくさんさんのことを話さない』『相手の反応をみながら話をする』などをあげた者は少なかった。このことが「言語表現」の得点に反映されていると推察された。また、高齢者とのコミュニケーションにおいて心がけていることの中に、表出系の対人スキルである「自

己主張」に該当するものがみあたらなかった。これは、ENDCOREs メインスキル得点において「自己主張」への苦手意識をもっていったことが反映された結果であると考えられた。

【受容と尊重】に含まれる「相手の話をしっかり聴く」と「高齢者が話しやすい態度で話を聴く」はENDCOREs メインスキルの「他者受容」に、「安心感を伝える」は「表現力」と「他者受容」のコミュニケーション・スキルに該当する内容と考えられた。そして、【良好な関係づくり】に含まれる「話しやすい雰囲気や環境に配慮する」は、ENDCOREs メインスキルの「自己統制」に、「相手に関心をもち理解を深める」は「読解力」と「関係調整」、《ひとりの人として敬意をもち出会う》は「関係調整」のコミュニケーション・スキルに該当する内容と考えられた。高齢者とのコミュニケーションで心がけていることは、看護学生の高齢者とのコミュニケーション・スキルそのものを評価するものではないが、その指向性はコミュニケーション・スキルに何らかの影響を及ぼすと考えられる。

認知症高齢者とのコミュニケーションにおいて困難を感じる看護学生は多い。古市ら¹²⁾は、認知症高齢者とのコミュニケーションで看護学生が、【拒絶の場面】【言葉が理解できない場面】【ネガティブな雰囲気の場合】【認知症の症状が影響する場面】に対して困難感を抱いていることを明らかにしている。認知症高齢者とのコミュニケーションでは、加齢に伴う身体的特徴に配慮することや認知症の人が安心できること、その人らしさを尊重したコミュニケーション方法¹³⁾が大切であるとされている。本研究において、高齢者とのコミュニケーションで心がけていることとして回答のあった『相手の視界に入って話をする』『わかりやすく伝わりやすいことばを選ぶ』『一度にたくさんのかたを話さない』『タッチングをする』『ユマニチュードの技法を用いる』『沈黙や間を大切に作る』『話を遮らず最後まで聞く』『自分の考えを押し付けたり相手を否定せず尊重をする』『困った顔や面倒そうな態度を取らない』『敬語や丁寧なことばで話す』などは、認知症高齢者とのコミュニケーションにおいて特に大切になるコミュニケーション・スキルであり、3年生において多くみられた。3年生は高齢者との基本的なコミュ

ニケーションに加えて、認知症高齢者への看護について講義や実習で体験的に学んでいることが、このような結果につながったと考えられた。

4.3 今後の教育への示唆

本研究では看護基礎教育の途中段階にある看護学生のコミュニケーション・スキルにおける課題が明らかになった。本研究および先行研究から、看護学生が老年看護に必要なコミュニケーション・スキルを身につけていくためには、まず基本的なコミュニケーション・スキルである「自分の考えを論理的にまとめて表現するスキル」を強化し、表出系、反応系、管理系のスキルがバランスよく備わるように支援することが課題となることが明らかになった。本研究の対象者においても高齢者と接する頻度は少ない。また、SNS世代にある看護学生は日常生活場面においても、自分の考えを論理的にまとめ相手に伝える機会が少ないことが予測される。そのため、講義内での協同学習や演習でのグループ活動などの機会を意図的に設定することや、さまざまな人と関わる機会を活用し、基本的なコミュニケーション・スキルを育む教育的支援を行うことが重要になると考える。このことは、看護において重要になるチーム力を培うことにもつながることが期待される。また、コミュニケーション・スキルを含む看護実践力は、経験学習を重ねることにより育まれる。それ故に、高齢者とのコミュニケーション・スキルにおいても、認知症高齢者とのコミュニケーションに主眼を置いたシミュレーション教育や臨地実習で高齢者とのかわり場面を教材化し、リフレクションする機会を意図的に設定すること等が教育的支援として考えられる。

4.4 本研究の限界と今後の課題

本研究により得られた知見は、2年次および3年次の看護学生のコミュニケーション・スキルの特徴と課題であり、看護基礎教育を修了した段階のものではないことが研究の限界としてあげられる。そのため、看護基礎教育終了時点でのコミュニケーション・スキルについても調査し、看護基礎教育における課題、看護継続教育に向けた課題を明らかにすることが今後の課題である。また、コミュニケーション・スキルを育む教育的支援の効果についての評価も今後の課題であると考えられる。

倫理的配慮

研究への参加は、本人の自由意思に基づき行うこと、参加の有無による今後の評価への影響はないこと、学業上の不利益は一切生じないことを文書と口頭で説明した。また、調査を成績評価が終了した学年末に実施することで学生の心理的負担を軽減した。本研究は川崎医療福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号17-107）。

謝 辞

本研究にご協力くださった A 大学の看護学生の皆様に心より感謝いたします。

付 記

本研究は平成29年度川崎医療福祉大学医療福祉研究費の助成を受けて実施した。尚、本研究の内容の一部は、川崎医療福祉大学第25回医療福祉研究報告会にて発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省医政局看護課：厚生労働省「看護基礎教育検討会」における検討状況。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/098/gijiroku/_icsFiles/afielddfile/2019/05/27/1417062_5.pdf, 2019. (2022.3.17確認)
- 2) 文部科学省：学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/47/siryu/_icsFiles/afielddfile/2011/11/04/1312488_5.pdf, 2011. (2022.3.17確認)
- 3) 高橋梓：過去5年間の看護学の学習における看護学生のコミュニケーションスキルの特徴に関する文献検討。武蔵野大学看護学研究所紀要, 15, 11-18, 2021.
- 4) 藤本学：コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けた ENDCORE モデルの実証的・概念的検討。パーソナリティ研究, 22, 156-167, 2013.
- 5) 藤本学, 大坊郁夫：コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み。パーソナリティ研究, 15, 347-361, 2007.
- 6) 荒添美紀：看護場面における人間関係をつくるためのコミュニケーション・スキル尺度。日本看護技術研究学会誌, 4(1), 38-45, 2004.
- 7) 畑中美穂：コミュニケーション。吉田富二雄, 宮本聡介編, 心理測定尺度集V—個人から社会へ〈自己・対人関係・価値観〉—。初版, サイエンス社, 東京, 272-277, 2012.
- 8) 小沢久美子, 久保宣子, 下川原久子, 日當ひとみ, 古館貴美子, 佐々木真湖, 切明美保子, 川野恵智子, 蛭田由美：基礎看護学実習における看護学生のコミュニケーションスキルと対人不安に関する研究。八戸学院大学紀要, 59, 1-12, 2019.
- 9) 山本陽子, 青戸春香, 奥田玲子, 深田美香：看護学生のコミュニケーションスキルの特徴—ENDCORE モデル, プロセスレコードの振り返りによる分析—。米子医学雑誌, 70, 1-12, 2019.
- 10) 太湯好子：患者の心に寄り添う聞き方・話し方 ケアに生かすコミュニケーション。メヂカルフレンド社, 東京, 2002.
- 11) 篠崎恵美子, 藤井徹也：看護コミュニケーション—基礎から学ぶスキルとトレーニング—。医学書院, 東京, 2015.
- 12) 古市清美, 高橋ゆかり, 本江朝美, 高岡素子：認知症高齢者とのコミュニケーションにおける看護学生の困難感を抱いた場面。第42回（平成23年度）日本看護学会論文集, 362-365, 2012.
- 13) 古村美津代：認知症高齢者とのコミュニケーション。水谷信子, 水野敏子, 高山成子監修, 三重野英子, 會田信子, 深堀浩樹編集, 老年看護学, 第4版, 日本看護協会出版会, 東京, 326-330, 2022.

(2022年5月9日受理)

Features of Communication Skills of Nursing Students (Part 2): From the Perspective of Communication with the Elderly

Keiko TAKEDA, Chieko SHIRAIWA and Tomoko KOYABU

(Accepted May 9, 2022)

Key words : nursing student, communication skill, gerontological nursing

Abstract

This study aimed to clarify features of communication skills of nursing students by focusing on communication with the elderly. We conducted an anonymous self-administered questionnaire survey of 246 2nd and 3rd year nursing students at University A about their communication skills using ENDCORs and NCSI, and their attitudes toward communication with the elderly. The number of valid responses was 92. As a result of the analysis, nursing students of University A had low skills in “expressiveness” and “self-assertion” in ENDCORs, and in the NCSI low group, there were problems in “language expression”, “independence”, and “logic”. In communicating with the elderly, the nursing students tried, “expression methods based on the characteristics and understanding of the elderly”, “reception and respect”, and “building good relationships”. It was suggested that strengthening “the skill of logically summarizing and expressing one’s thoughts” is also an issue in the development of communication skills required for gerontological nursing practice.

Correspondence to : Keiko TAKEDA

Department of Nursing

Faculty of Nursing

Kawasaki University of Medical Welfare

288 Matsushima, Kurashiki, 701-0193, Japan

E-mail : takeda@mw.kawasaki-m.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.32, No.1, 2022 213 – 220)